

面白い会話ができるようになるトーク術の判明とその理由

工藤 匡人

コミュニケーション能力に不安を感じている人が頼るアイテムの一つとして、トーク術について書かれた文献がある。しかしトーク術を紹介した文献であれば、どれを読んでもコミュニケーションスキルが上がるのかと言われればそうではない。素人にとっては、自分を成長させてくれる文献とトーク術を選ぶだけでも一苦勞である。

また笑いや面白さについての研究は数多くあるが、それを素人でも扱えるような技術として提供することに成功しているものはほとんど存在していない。

そこで本研究では、6冊の文献から抽出したトーク術を用いて、どのトーク術が人を「面白い」と思わせることができるのかを判明させる。また、なぜそのトーク術は面白い会話の手助けとなるのか、もしくは人がどういった要素に面白さを感じるのかなどについてもみていく。

まずトーク術についてのデータを得るために2つの被験者実験を行った。最初の実験では文献から抽出した29個のトーク術を用いて、10人の被験者にトーク術1つにつき1つの短い会話を作成してもらった。

次の実験では、別の被験者10人に150個、もう10人に140個の計290個の会話について、面白いかどうかの五段階評価を行ってもらった。この20人は、評価者の性別などの属性による回答の違いなどを調べるために、男女10人ずつとした。

集まった結果から最も面白い会話を作ることのできるトーク術は「慣用句をそのままの意味で行おうとする」と判明した。続けて、どういった要素がその結果をもたらしたのか、また面白いと感じるものに傾向の差はあるのかなどを求めるため、要素間に関係性があるかを検定した。

検定の結果、男女間で有意差 ($p<0.05$) が見られた。またどういった要素に面白さを感じたのかを分かりやすくするため、トーク術を同じ面白さの分類としてまとめたものを要素として用いたところ、女性は男性に比べて会話を面白いと感じやすく、男性に比べて特に、優越感と安心感の与えられる会話を好むことが分かった。また実験の結果から、別々の会話を評価したグループ1とグループ2の評価には大きな差異があったが、トーク術の分類と各グループとの間には有意差が見られなかったため、どういった要素を面白いと感じるかの傾向は評価者ごとに違いがなく、担当したトーク術が持つ要素の違いによって結果に差異が生まれたのだと考察することができる。

しかしなぜトーク術が今回のような順位となったのか、本当に今回の評価が一般的なものと言えるのか、などについては確証を得られなかったため今後の課題としていく。

(指導教員 真栄城哲也)